

いろは文字くせり 鉾くせり (その二十六—Man-yoistのつづやき)

江尻成泰 

いろはにほへと ちりぬるを 色は匂へど 散りぬるを

わかよたれそ つねならむ 我が世誰ぞ 常ならむ

うみのおくやま けふこえて 有為の奥山 今日越えて

あさきゆめみし ゑひもせず 浅き夢見じ 酔ひもせず

(ん)

(はじめに)

いとど面白おもしろ

浪漫ろまんの国は

遙か古代に

匂におふ言ことの秀ほ

(一)

仄ほのめく人へ

片思へんし懐いだくと

と三日月立ち

些ちとや眉形まゆなり

柳眉りうびに酔よひぬ

濡ぬるる目を見る

振仰ふりさけて

若月わかづき見れば 一目見し 人の眉引まよびき 思ほゆるかも

(卷六一九九四 大伴家持)

(二)

瑠璃色鳥を

招くこの浦回

わが目に清か

鴨羽の霜よ

葦に鴨また

揺蕩もあれ

冷冷宵ぞ

そよ大和愛づ

葦辺行く

鴨の羽がひに

霜降りて 寒き夕べは

大和し思ほゆ

(卷一―六四 志貴皇子)

(三)

月夜に琴音

音は竹林な

名の七賢ら

爛柯嗜む

夢想風流

現語り居

韻事遊びの

飲む酒はおお

奥の香深く

奇しきは酒や

やよここの様

まこと欲る酒

古の

七の賢しき

人どもも

欲りせしものは

酒にしあるらし

(卷三―三四〇 大伴旅人)

(四)

眷属集ふ

無事に帰来

言霊の冴え

宴を開きて

天恵はああ

熱き酒にさ

杯の幸

君の道見ゆ

斎つ日本の目

めでたしや君

磯城島の

日本の国は

言霊の

幸はふ国ぞ

ま幸くありこそ

(卷十三―三二五四 人麿歌集)

(をはりに)

右万葉詩

暫しの幸絵

酔ひて繕ひ

日はつれなくも

文字を並ばせ

昔時を旅す

令和二年(二〇二〇年)九月十四日

註

(一)

振仰けて……||記録に残る家持の一番若い時の歌。一六歳か。三日月に美人の眉を思う早熟

な少年。歌われた女性は、叔母坂上郎女の娘で後に家持の妻となる坂上大嬢だと

か。この歌の前には坂上郎女の三日月と眉の歌が載っている。

仄めく||ほのかに見える、聞こえる、匂う、など。

片思||片思い。

と三日月立ち||とは「すると」「そのとき」。直前の「片思懐くと」のと重なっている。

柳眉に酔ひぬ 濡るる目を見る||ませた家持少年なら続けそうだと思っつけてみた。柳眉

は柳の葉のように細くて美しい眉。美人の眉にたとえる。

(二)

葦辺行く……||慶雲三年(七〇六年)秋文武天皇の難波行幸に従った時。寒い夕べにあたた

かい我が家进行。「羽がひ」は「羽交」で左右の翼が交わる部分。そこに霜が降り

ているなど、細かいところに意を尽くした描写。(暗くて見えていないだろうが。)

葦は難波瀉(大阪湾の入江)の代表的景物。

招くこの浦回うらわ 浦回うらわは海岸の湾曲して入りくんだところ。招くは引き寄せる。

葦よしに鴨あしまた 葦あしは「悪あし」に通じるので「善よし」にちなんで「葦よし」ということあり。こ

こでは、この詩作（？）上の第一の約束事もあるのでよしと。

(三)

古いにしへの…… 大伴旅人の「酒を讃ほむる歌十三首」から。

七ななの賢さかしき 人どもも 竹林の七賢。中国晋代(三世紀後半)に俗世を離れて竹林に集まり、

酒を飲み琴をひき清談をしたと伝わる七人の隠者。

名の七賢しちけんら 二うわさの七賢人。

爛らん柯か 困碁きんぎの異称。これも中国晋代、山に入った樵きこりは童子たちが碁を打っているのを見て

いてあまりにも長い時間がたち、気がつくと斧の柄(柯)が腐って(爛)いた、とい

う故事から。

夢想風流 雅人、士君子が身につけるべきものとして琴棋書画(琴・困碁・書道・絵画)の

四芸が尊たげられた。

韻事遊みんじすびの 韻事は詩文を作ること。

奇くしきは酒や 奇くしは不可思議だ、神秘的だ。酒には靈妙な力があることから、くしは

酒の異名となっている。(その二十、その二十三で笑酒あぐしという言葉を使った。)

(四)

磯城島しきしまの…… 地方へ任官するか選ばれて遣唐使として海を渡るかという人への送別会、歡

送会での歌のような感じ。長歌と反歌のうち、これは反歌。長歌で「事幸ことよく 真幸まよく

坐ませ」と言拳ことあけ(言葉に出して言い立てる)している。

言靈ことたまの 幸ゆきはふ国ことたまぞ 言葉に宿る靈力が幸いをもたらす国。「言靈ことたまの 助たすくる国ことたまぞ」と読む

ことが多いようだが、巻五―八九四(好去好来よきゆきよきの歌)に「言靈ことたまの 幸ゆきはふ国ことたまぞ」とい

